

日本語文章表現の授業における漢字教育の試み

| | |
|-----|---|
| 著者 | 前田 淳 |
| 雑誌名 | 比較文化 |
| 号 | 5 |
| ページ | 151-164 |
| 発行年 | 1999 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1106/00000621/ |

日本語文章表現の授業における漢字教育の試み

前田 淳*

<はじめに>

本稿は平成11年度前期の「日本語表現II」で筆者が行った漢字教育の概要と現時点で見られる成果とを紹介してその必要性を説き、授業改善のために諸賢の批判を仰ごうとするものである。

<宮崎国際大学における「日本語表現」について>

宮崎国際大学では「日本語表現」が全学年必修となっており、学生は各学年の前期あるいは後期にそれぞれ「日本語表現I」・「日本語表現II」（前期のみ）・「日本語表現III」・「日本語表現IV」を履修することが義務付けられている。この科目の重要性は「授業における主言語は英語とするが、英語能力は国語能力を基礎とするという考え方に基づき、日本語の再学習を必修とする。」（下線筆者）という「宮崎学園ニュース第一号」（注01）の文言が端的に語っている。ここに学生の日本語能力の養成を言わば至上の課題として大学が捉えていることが理解される。英語が教育の場での主言語と位置付けられている宮崎国際大学では時間数こそ少ないが「日本語表現」が大学のカリキュラムで非常に重要な位置を占めるものであることは改めて認識されねばならず、この科目の重要性は繰り返し強調されなければならない。

「日本語表現」が扱う領域は日本語の文章表現のみに止まらず、その話し言葉の技術にまで及ぶ。この科目が一年から四年まで必修となっていることはこの科目にとっても好条件であるそれは「日本語表現」全体を連続的発展的に組み立てることができるからで、平成10年度は一年次（「ディベート」）及び三年次（「研究発表の方法」）で話し言葉の、二年次（「小論文の書き方」）及び四年次（「履歴書・論文の書き方」）で書き言葉の日本語表現の技術を磨くことを主な目的としてカリキュラム全体を再構築した。「日本語表現II」は平成11年度に授業内容を修正し「漢字」としたが、本稿はこの平成11年度の「日本語表現II」における試みを紹介し、その意義を説こうとするものである。

宮崎国際大学における「日本語表現」は幾つかの点で他の科目と少しく違った性格を持つと考えられる。表現が表現主体の内面と深く関わり精神の発動を俟って始めて可能であるという議論はここではひとまず措きたい。「日本語表現」が他の科目と性格を異にする所があると考えられるのは、他の科目が概ね思考力を身に付けるという目的を持ち授業もそれに応じて学生の能動的な活動を重視するものであるのに、この「日本語表現」には（日本語の表現）技術の習得という性格が強く見られるからである。

ピアノの練習曲や空手の型を考えると分かりやすいが、練習曲が弾きこなせるとか決められた姿勢「型」がとれるとかでなければ「習得」したとはいわれない。そしてそれには練習が必要である。現在よく売られている日本語表現関係の新書がタイトルに「練習」という文字を使っ

ていることを指摘するのも今更めくが、「日本語表現」についても基本的理解に異なるところはない。必要なのは技術習得のためのトレーニングであり、稽古である。

「日本語表現」が持つこの技術の習得という面に目を向けると、進め方によってはこの授業が学生をやや受動的な状態に留める虞れがあることは十分予想されることである。本稿が取り上げる漢字学習についていえば、漢字の書き取りや漢字検定の模擬試験等を毎回繰り返すこと等がその例で、たとえそれが漢字の知識を増加せしめる上で著しい即効性があると認められる場合でも、安易に薦めることはためらわれる方法である。というのは第一に大学での勉強が漢字への持続的な興味を呼び起こし、それを端緒として卒業後も学生が漢字の学習を心掛けるようになることが望まれるのに、模擬試験を繰り返す等の学習方法が持続的自主的な勉強へと学生を導くとは思えないからである。少なくともその最善の方法であるとは思われない。このことはまた大きくは大学教育の理想に背き、近くは宮崎国際大学が目指す教育の理念に悖ると考えられる。宮崎国際大学の平成11年度「学生便覧」(1999 Bulletin)には次のように記されている。

本学の教育は、自主的学習という教育理念に基づいている。これは、知識の修得は、単に教科書の読解や講義の聴講という受け身の作業からではなく、学生自身が自主的に読み・書き・討論し・問題解決に取り組む作業によって達成されるという考えである。自主的学習によって、学生はさらに高度の思考力を養い、分析・総合・評価・創造を行う能力を身につけるのである。(同4頁)

今回私が担当した「日本語表現II」もこのような教育の理念を忘れぬよう授業内容を構成するように努めた。その内容は以下具体的に述べて行くが、この授業の目的を簡潔に述べたものとして授業の第一日目に学生に配布したシラバスに掲げた次の文章がある。(注02)

科目概要: 文章語として役に立つ漢字・漢語を学ぶ。漢字・漢語を学ぶことを通じて効果的且つ的確に自己を表現する文章力を身に付ける。更に文章語における漢字・漢語の重要性を多角的に考察する。漢字は表意文字であるので、漢字・漢語を学んで豊かな語彙を獲得し、高い表現力を身に付けることが期待される。漢字検定2級程度を当面の目標とする。授業では漢字パズル等を行う。

この「科目概要」はこの授業が何を目標として、学生に何を求め、どのような能力を養おうとしているかを述べている。次に筆者がこのようなことを考えるようになった経緯を次に述べて見たい。

<発端>

筆者は漢字能力の養成が学生の日本語の文章表現能力を向上させる上に有効であるとするものである。そのように考えるようになった切掛けは平成10年度に担当した「日本語表現II」にあった。

昨年度の「日本語表現Ⅱ」で筆者は「小論文の書き方」を指導した。その時小論文の書き方をいくつかの段階に分けて指導しようと試みた。基本的な段階を簡単に並べて見ると

テーマを設定し

- ⇒ アイデアをあつめ
- ⇒ その中から小論文の論点となる問題点を発見し
- ⇒ 考えた論点に沿ってアイデアをまとめていくつかの小部分に分け
- ⇒ その小部分を並べ変えて論のアウトラインを構成し
- ⇒ 肉付けをする積もりで小部分の文章を書いて行き
- ⇒ そうして書いた各部の文章をつなぎ合わせて一篇の小論文とし
- ⇒ 推敲する

というようになる。この各段階にそれぞれ練習があり、その指導があるわけである。また小論文が扱うテーマによってこのような順序が守られないこともある。また各段階は簡単に説明できるものもあればそうでないものもある。そしてそうでないもの内最も時間を費やすべき段階が「肉付けをする積もりで小部分の文章を書いて行」という所であった。この段階の指導にはもっと時間をかけてしかるべきであると感じた。そして「日本語表現Ⅱ」で漢字を教え、基礎的な文章表現の能力を付けさせるべきだと考えたのである。

総じて表現力をつけるには何よりも言葉に親しみ、それについて繰り返し考える機会を持つことが必要なのではないだろうか。そうすることで一つ一つの言葉の遣い方や自分の考えを正確に表現することも会得されてくる様に思う。漢字や漢語と取り組む時間を設けることはこの目的にも適い、表意文字であるという漢字の性格から、たとえ一文字であっても漢字について考えることは語彙を豊かにする。それは的確な表現にも繋がる。この様なわけで漢字の学習は筆者が考えている目的を達成する方法としては最適であると考えられたのである。

しかし、我々の前に広がる漢字の世界は広大であり、たとえ対象とする漢字を日本語の文章表現に必要な範囲に限ってもその知識や技術の習得に前期のみの「日本語表現Ⅱ」が十分な時間を提供しえないことは明らかである。ここで漢字習得の努力は生涯続くものであることを考えると、「日本語表現Ⅱ」は学生の漢字に対する興味を喚起し、以後の漢字学習の切掛けを提供することを第一の目的とすべきであるという先述の考えが改めて確認される。

漢字習得への意欲を持続させるには、動機付けが大切である。学習意欲を高める動機付けをどのように行ったか、それを話す前に現在社会に見られる漢字見直しの気運について触れておきたい。

<漢字見直しの気運>

漢字に対する一般の関心が高まり、それにもなつて漢字見直しの気運が生じていることは以下に述べる数種の漢字クロスワードパズル専門誌の存在や財団法人日本漢字能力検定協会主催の「日本漢字能力検定試験」（以下「漢字検定」と略称）の受験者が年を追う毎に増加していること（注03）等の事実から窺うことができる。後者の「受験要項」には「全国の4割を超える大学・短大が漢検の入試優遇を実施又は検討中。」として366校が「漢検の入試優遇

校」として数えられており、具体例として京都産業大学入試課課長の談話が載せられている。この他126校が「入試優遇対象に漢検を検討中」といい、高校についても「漢検取得者、高校の単位認定制度へ！！」として将来高校での教育に漢字検定が取り入れられる予想が語られている。このような社会の漢字見直しの気運は、授業を進める上でも好都合で、「漢字検定」等は授業にも積極的に取り入れるように考えた。

<動機付け>

漢字に興味を抱かせるにはどうすればよいか。中には漢字に対して既に強い興味を持つ学生もあるが、本学のように授業等の勉強における使用言語が英語である環境にあっては、学生は漢字を進んで学習する機会を失いがちである。

学生の漢字に対する興味は先ず何よりも漢字そのものに対する興味でありたい。それは漢字の意外な一面やその面白さ等を示して見せることで刺激・持続されるが、後に述べるミニレクチャーの項で十分理解されるように、学生がこれまでに身に付けた漢字の知識に助けられるので、漢字への興味を呼び起こすことはそれ程困難なことではないようである。

学生の興味を引く上で効果があった例を挙げると、先ず宛字がある。特に「劍橋」や「牛津」等の宛字を示し意味を問うことはクイズを解くのに似たの知的な興奮が伴う。その上でどうしてこのような宛字が可能なのか、このような宛字を考えだす意識は何か等々を問いかけることは漢字の性格、日本語の中の漢字の役割を考えさせることに繋がり、学生は面白さから漢字への探究心を持つようになる。

次に解字にも学生は大いに興味を示したようである。例えば「蟹」を分解してこの漢字の成り立ちを示すことは漢字の成り立ちの面白さを紹介する好例である。「孫の手」の本来の意味を問うことや、旧字体と新字体とに関わる問題も学生の注意を引き、それとも関わるが部首もまたその不統一な側面を指摘することで学生の驚きと興味とを引き出すことができる。

このような漢字自体に対する興味と並んで、漢字熟語等が与える知的な印象や漢語によって可能な簡潔な表現、その表現が与える美的な印象、類義語などの漢字表現が持つ微妙な意味の違いとそれを把握することで達成される的確精妙な表現、的確精妙な表現の達成にともなう知的な快感等々日本語の文章表現における漢字の利点、漢字の重要性、必要性、便利さ等を機を見、折を捉えて説くことも学生の学習意欲を高める上で効果がある。

公務員の採用試験を始めとする就職試験等の際に漢字の能力が評価の対象とされることを明らかにすることも、学習の動機付けとなる。更に恐らくは全ての日本人学生に予想される生涯にわたる漢字との付き合いを強調し、漢字の知識が生涯身を離れることのない「知的財産」となることを指摘するのも学生の学習意欲を高めるのに有効である。

漢字への関心を喚起する上で今回恵まれていたことは、本学のアメリカ人教員中に易経の研究者(注04)がいたことである。既に易経という研究テーマから明らかなように、この教員は中国語には極めて堪能で漢字全般に強い興味を持ち広い知識を有していた。この教員に教室に来てもらい、どうして漢字に興味を持ったか、どんなところが漢字は面白いかなど漢字をめぐっ

て自由に十五分程の短い話を英語でして貰うことにした。話の内容は時間の制約もあり断片的にならざるを得ない箇所もあったか、例えば国という文字の発生を古代の中国の地図を用いて説明する等、知的な興奮を煽るものが十分あり、学生の漢字学習に向かう意欲を刺激したのではないかと筆者には考えられた。時間が短かった為に深い内容に至りえなかったことはこの教員にとっては勿論、私や学生たちにとっても残念であった。このアメリカ人易経研究者のように漢字圏ならぬ国の人間が漢字圏の人間である我々日本人よりも漢字について強い興味を持ち、それに伴う広い知識を所有しているということは学生を驚かしたに違いない。これらは下準備で、次に授業の目標が効果的に達成できるような授業の内容を考えなければならない。

<四本の柱>

授業内容は「漢字クロスワードパズル」・「ミニレクチャー」・「漢字検定」という三本の大きな柱に「翻訳」という小さい柱を加えて構成した。これらは各々漢字への興味と知識を強化する自然な段階ということ考えたのである。即ち当初の目論見を述べるならば、先ず「漢字クロスワードパズル」で漢字を楽しむ雰囲気を作る。教室に漢字に対する親しみが生じたところで「ミニレクチャー」に移る。ここで学生は各々の興味を緒として漢字研究等の世界を垣間見ることになる。こうして強められた漢字への興味と得られた知識とをもって学生は次の段階である「漢字検定」に進む。更に宮崎国際大学の学生の英語の力を「日本語表現」で利用するという考えから最後に「翻訳」という柱を加えた。これは漢字の知識が日本語表現でどのように生かされるかを実際に示す目的からであるが、同時にこれがまた将来本学の学生に殆ど例外なく求められるであろうところの翻訳の技能に触れておく適当な機会であると考えたからである。翻訳に要求される能力が如何に多岐に渡っているかということは、その方面の書物を見れば直ちに納得されるが、「日本語表現」が触れるのは最適な訳語の選択ということで、これは翻訳能力の基本でもあり最終目標でもあろう。ここに漢字の知識を組合わせて授業を考えた。これら四本の柱が今回の日本語表現の内容を構成する。以下その柱の一本々々について説明して行きたい。

<漢字クロスワードパズル>

漢字クロスワードパズル（以下「漢字パズル」と略称）には「漢字道」「漢字名人」「漢字道場」「漢字スペシャル」「漢字ワンダーランド」等数種の専門雑誌がある。これらには問題を解いて正解を送れば抽選の上で賞品が貰えるという一種の報奨が用意されていて、これが漢字パズルを解く人の意欲を刺激しているようである。しかし、漢字パズルの人気を根柢において支えるのはこのような賞品ではなく、やはり一般に盛り上がる漢字に対する興味と知識、そして知的な刺激を親しみ易い形で提供するクロスワードパズルという出題の形式にある。それ

を考えると学生の興味を刺激しながら漢字を学習させたいという意図を持つ今回の「日本語表現II」でも漢字パズルが有効であることは十分予測できる。

漢字パズルの時間は先ず実際に簡単な漢字パズルを解かせることから始まる。これはこれまで漢字パズルに全く触れたことがない学生にその解き方を教える目的からである。次にやや複雑な漢字パズルを解かせ、同じ柁目を使って今度は学生に漢字パズルを作成させる。

漢字パズルの作成がどのような点で漢字学習に有効であるのか。先ず柁目を埋める漢字・漢語を求めて積極的に辞書を引くようになるということが考えられる。授業では最も一般的であると思われる形式の漢字パズル(付録参照)を用いたが、これを完成させるには自分が持っている漢字熟語の知識を総動員する必要がある。この時点で国語辞典及漢和辞典は欠かせない。

漢字パズルの作成を終えた学生には、次にパズルの柁目を埋める個々の漢字熟語の意味を書かせ、縦横の並びを埋める熟語のヒントのリストを作らせる。この作業では国語辞典及漢和辞典は不可欠である。こうすることによって漢字熟語の意味を学生は確認することになり、それが漢字熟語の意味を正確に理解することにつながるのである。

漢字パズルの作成に辞書を引くことを期待しても、漢字の著しい造語力から学生は恣に新語を作り改めて辞書を引くということをしない、ということも起こりうる。これに対処するには使用熟語に少々制約を設けるのがよい。たとえば、漢字パズル作成に必ず用いる熟語をあらかじめ幾つか指定しておく等の制約である。今回は四字熟語の表(注05)を与えておき、漢字パズル作成に四字熟語が必要になった時は、できるだけこの表からそれを拾うようにさせた。筆者は今回主に漢字検定二級レベルと認定される四字熟語を選んで表を作った。それはこのレベルの四字熟語がややレベルも上級に属し、かつ使われる機会も少なくなく、従って学習の効果も実感されるだろうと考えたからである。他にも固有名詞は使わない、四字熟語のヒントには熟語を示さず、意味を記す、同一熟語の使用は一パズルにつき一回に限る等々の制約を課した。ここでは学生に、自分の持っている漢語の知識を総復習し、ある漢語についてはその意味を正確に理解し直し、四字熟語の新知識を獲得することが期待されているのである。

<ミニレクチャー>

このミニレクチャーは学生が各自の興味に従って漢字に関係するテーマを選び、文献に当たって考察した結果を発表するもので、発表時間は15分、その後質疑応答の時間を5分間取る。

学生による研究調査結果の発表は一般にプレゼンテーションと呼ばれ、「ミニレクチャー」という呼称はこのような適当ではないと考えられるかもしれない。これは学生が教壇に立つ教師のような気持ちで、充実した内容の話をしてほしいという筆者の気持ちを込めた命名である。

「各自の興味に従って漢字に関係するテーマを選」ぶというようなことは、意外と難しいものである。それは一般に疑問を持つということの難しさと共通するようで、漢字が余りにも身近であり、その存在が当然すぎて漢字について問い返す必要を感じないことにもよるようである。分かりやすい例を挙げると漢字の新字体で教育を受けてきた学生たちは旧字体を縁遠いも

のと感じ、新字体を当然としてそこに不合理がある場合もそれを思わないというようなことである。

自分でテーマを選ぶのに困難を感じる学生にはテーマの例を示すのが有効である。筆者は漢字について学生が興味を持ちそうなテーマを選んで話をし、ミニレクチャーの進め方を示したクラスもある。その他にもテーマを簡単に説明しただけの場合もあったが、そこで出したテーマの例には次のようなものがある。

- | | |
|------------------------------------|-----------------------|
| ① 音読みの種類について | ⑧ 「的確」と「適確」の書き換え |
| → 音読みの種類について | → このような変化は妥当であるか |
| ② 部首について | ⑨ 漢字の発生について |
| → 一見同じ部首と見える漢字で部首が違うのはどのような理由によるのか | → 会意文字の特徴は |
| ③ 国字について | ⑩ 異体字について |
| → 国字はどんな必要から作られたか | → 国の異体字(国、國、圀等) |
| → 国字はどんな法則で作られているか | → 異体字はなぜ発生するのか |
| ④ 四字熟語の成り立ちについて | ⑪ 漢字の解字 |
| → 日本で作られた四字熟語 | → 「蟹」という文字の成り立ち |
| → 「焼肉定食」は四字熟語といえるのか | ⑫ 誤解されやすい漢字の熟語 |
| ⑤ 四字熟語の有効な使い方について | → 「まごの手」の原意は何か |
| → 四字熟語を日本語表現に生かす方法 | ⑬ 形声文字の偏と旁の関係 |
| ⑥ 漢字の制限について | → 偏と旁の関係 |
| → 漢字制限の根拠は何か、それは妥当か | ⑭ 日本語での漢字の重要性について |
| → 編と篇、座と坐、消暑と銷夏 | → 漢字制限の根拠 |
| ⑦ 新字体と旧字体について | ⑮ 面白い漢字について |
| → 旧字体ではなぜいけないのか | → 井という漢字 |
| → 新字体の決定(虫、国等) | ⑯ 漢字の便利さについて |
| | → 漢字の造語力(激怒、激白、力投、粘投) |

学生は各自の興味を導き手としてテーマを選択し、それについて考察と調査とを行ってともかくも自分の選んだテーマについては自分の見通しを立てる。この際に述べるこのミニレクチャーの隠された意図と関連して大切なことは、発表が概説的・総論的なものにならぬように指導することである。そのためには先ず漢字について各自が懐く素朴な疑問を大切に、それを上手に育てて行くようにと繰り返し言葉を変えて説明を試みた。これまで学生が行ったミニレクチャーのテーマには以下のようなものがある。

- ・魚偏の漢字について
- ・漢字熟語「断腸」の用法
- ・「好意」「厚意」の使い分け
- ・羊羹には何故両字共に「羊」が含まれるのか
- ・日本語の文章における漢字の有効性
- ・「楓」の原義とその変化

- ・何故「真っ赤な嘘」と「赤」を使うのか
- ・「弱冠」の原義とその誤用
- ・新字体作成上の原理
- ・女偏の漢字
- ・「子」を鼠の意に用いるのは何故か
- ・何故「豚」は肉月なのか
- ・新たに漢字を作成することは可能か
- ・漢字は何故複雑化するのか
- ・会意文字の特徴について
- ・何故「桜」は「女」を含むのか
- ・「違和感」と「異和感」
- ・何故訓読のない漢字が存在するのか
- ・宛字の原理
- ・漢字の造語力（「電」を例にして）

これらを見ると学生は興味あるテーマを焦点を絞って具体的に選んでいることが分かる。これは自分たちが感じる素朴な疑問を大切にすると指導し、またテーマを絞るようにと繰り返したことが効を奏したと考えられる。しかしテーマをこのように定めることができたとしても、各自がその素朴な疑問を大切に育てるといことはそれほど容易なことではない。

たとえば、学生はテーマが決まった段階で参考資料を読み始める。これはあるテーマについては当然踏まなければならない段階であるが、ややもすれば専門家の意見に引き回される結果を招くことになり、大切に育てるべき各自の素朴な疑問がねじ伏せられて果ては霧散し、一応まとまった発表はできたとしても、論の中心が見い出されない生気のない発表になってしまいがちであるからである。これを防ぐにはまだ自分の考えが固まっていない段階では専門家の意見は見ず、自分の問題を考える上で必要な漢字資料を前にして先ずは自分でそれについて考えて見るようにと助言する。教員の指導が最も必要とされるのは集めた漢字の資料を検討考察して論を組み立てるこの段階である。テーマによって、このあたりの指導がうまく行く場合もあれば、選ばれたテーマが手強いものであるという認識に終わるだけの場合もある。しかし後者のような場合も、少々見方を変えればそれまで調べたことを生かしながら論を再構築することが可能である場合が多い。

先にいった「隠された意図」とはこれら一連の作業に卒業論文の為の練習という意味も含ませたかったということで、自分がこれから追究しようとするテーマを的を絞って追究する練習は、卒業論文作成を頂点とする大学での研究活動に必要である。

また学生が自らテーマを選び調査考察を繰り返して発表内容を育てて行くこのような授業の在り方は、本稿の冒頭に述べた宮崎国際大学の自主学習という教育の理念に沿っており、研究活動を通して教育を行うという大学教育本来の在り方を研究的な色彩のやや薄い「日本語表現」の授業においても踏まえることが出来たのではないかと考えるものである。

学生は概ねこの時間では積極的にテーマ追究には前向きであった。そのような学生にはミニレクチャーのテーマの漢字のことが頭から離れないというものもあり、中には非常に熱心にテーマを追究し、聞く側を敬服させる程力の籠ったミニレクチャーをする学生も存在した。学期の終わり頃に聞いて見ると、この「ミニレクチャー」が一番勉強になったという意見もあった。またある学生は「テーマを考えるのが段々面白くなって行った」ともいった。

この「ミニレクチャー」での問題点は学生が各自のテーマを決めるのをどのように指導するかという点にあった。これには例えば授業時間の後で個別に時間をとって指導するか、又は今回は簡単に済ませたが、テーマとなりそうな題目の説明をもっと詳しくするかなどの方が考

えられる。また「学生の興味に従って」テーマを選ばせるのではなく、こちらが考えたテーマを学生に割り当てるという方法も考えられる。これは時間的制約のある授業という枠の中で常に貴重である時間を有効に使える方法である。この場合「有効」とは時間内に授業のプログラムを効率よく消化するという意味である。この方がいいという学生もいたが、ここには学校の教育理念とも絡み、簡単に判断できない問題が含まれているようで、これについてはこれからも試行錯誤があることが予想される。

「ミニレクチャー」の締め括りとして、各自が行ったミニレクチャーの内容をまとめた二千文字程度のレポートを提出させることにした。本稿作成の段階ではレポートは出揃っていないので、確かなことは言えないが、書くことには正確な知識が求められるので、学生にとってこれは「ミニレクチャー」で調べたことを今一度調べ直した考え直して、より確実な知識を獲得する機会となる筈である。

<漢字検定>

授業の内容を考えた時点での目論見は「漢字検定」に出題されるのと同じ形式の問題を学生に作らせ、2級レベルの漢字の知識を身に付けさせるということであった。しかし、意外な程ミニレクチャーに時間をとられ、これは果たすことができなかった。問題の作成という最初の目論見に代えて、ミニレクチャーの時間にできた余り時間を利用して「2級 10日間のできる漢検練習問題」（注06）を解かせることにした。学生が真剣に問題に取り組んでいる姿を観察していると、これも漢字授業の一方法として利用できると思われた。特にこれは余った短い時間の活用法としてすぐれ、答え合せを工夫すれば「日本語表現II」にふさわしい内容が十分考えられる。今回行ったことは決して十分とはいえないが、そこから得られた知見はこの「漢字検定」を以後の授業でどのように利用するか、その方法を考えるヒントを与えるものである。

<翻訳>

最後に漢字・漢語の知識が実際の日本語表現の場でどのように生かされるかを見るために翻訳の授業を設けた。（付録2）として後に掲げるのは日本語における漢語と英語におけるラテン語起源の単語とが相似た受け取られ方をする所に着目したもので、ラテン語起源の英単語を日本語に翻訳する際に漢語を使うよう指示することで、漢語の一使用法を考えようとするものである。これは授業では使わなかった。授業で使ったのは下のもので、これはもっと学生の現実の興味に訴えようとするものである。即ち「英検合格のための1級必須単・熟語2300」（旺文社）から任意に単語を選んだのがそれで、それに添える文例はベンジャミン・フランクリンの自叙伝から採った。文例は幾分古いが、これは日本語においても漢語を使った文章語が話し言葉に比べ一般に古めかしい印象を与えるのを考えに入れたのである。また漢語を用いた日本語の表現が文章にもたらす効果を学生が理解しやすいように考えたのである。

先ずこの文章を示して、このような簡潔な表現がフランクリンの得意とするところであることをいう。そしてその簡潔な表現を日本語に移すには漢語表現が適当であることを、例えば、

下線を引いた単語の意味を説明しながらいう。説明文中の「古風な単語・語法」という箇所にも“Eat not”という禁止表現などを例にして注意を与える。この時「古い」「古めかしい」「古くさい」「古びた」等「古風な」の同義語を幾つか上げて、その同義語間の意味の相違に注意を向けさせる。これは訳語を考える時に意味の近い語群の中で最も適当な語を選択することが肝要であることを示すためである。次に学生に標題の単語を訳させる。例えば TEMPERANCE では「節制」「自制」「克己」「禁欲」「断食」「禁酒」等々が上がる。この時少々古い辞書を見ることを勧める。またこの段階で余り厳密に語の選択を行おうとすると単語が出ない。出る単語が少ないと後に行う語義を比較し適訳を選択するという重要な作業が困難になるので、この段階では自由に考えさせ、出来るだけ多くの訳語が出るように考える。

このような作業を各文章で繰り返して、最後に一文にまとめるのである。残念ながら本稿を作成している時点ではこの最終段階にゆく途中の段階に留まっていたので結果を見届けることは出来なかった。

(問題) 次の英文は Benjamin Franklin の自叙伝から採ったものである。古風な単語・語法も混じっているが、英文はどれも簡潔を旨としている。これらを今漢語表現を用いて簡潔な日本語に直したい。訳を幾つか考えてみよう。(「英検合格のための1級必須単・熟語2300」(旺文社)にある単語には下線を引いた)

① TEMPERANCE. - Eat not to dullness; drink not to elevation.

.
.

.

② FRUGALITY. - Make no expense but to do good to others or yourself; *i.e.*, waste nothing.

.
.

.

③ MODERATION. - Avoid extremes; forbear resenting injuries so much as you think they deserve.

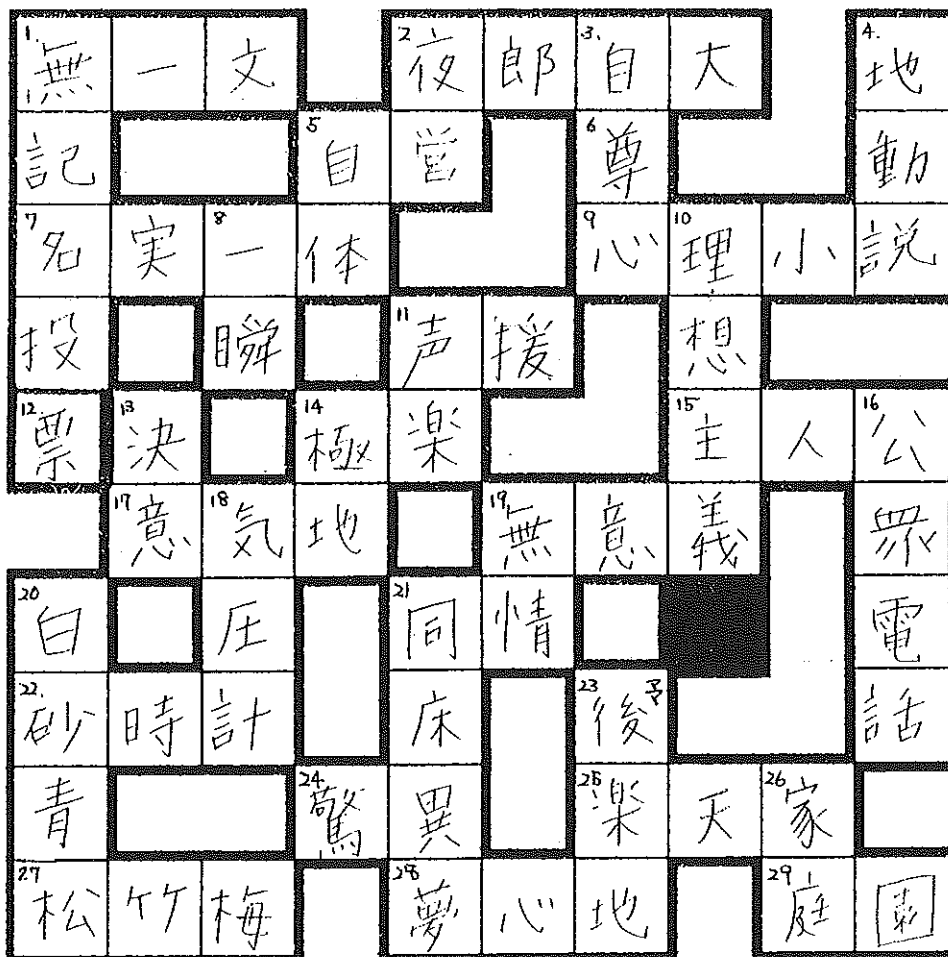
.
.

.

<むすび>

大学レベルの日本語の文章表現の授業においても漢字教育は必要であると考え、以上のような試みを平成11年度春季「日本語表現II」で行った。授業内容やその構成の仕方、指導方法等には筆者の力不足から不十分な点もあるが、漢字教育が必要であることには疑問がなく、これからも漢字の能力の向上を目指す授業の在り方を探り、改善の努力を続けて行かなければならないと考えている。大学レベルでの効果的な漢字教育の在り方を模索する現在、今回試みた授業内容を報告し、授業改善の方途を示すご意見を頂戴できれば幸いである。

(付録1)



大 漢 字 パ ズ ル

作成 グループ C

曜日 金



ヨコ

- 01 金銭を全然持っていないこと。
 02 自分の力量を知らないで“仲間の中で”うぬぼれているさま。
 05 個人が経営すること。
 07 名称と実質をともにあわせ持つこと。
 09 作中人物の感情や心理の分析を手法とした小説。
 11 声をかけ応援すること。
 12 賛成・反対を投票で決めること。
 14 たいてい安楽でい酒や苦勞のない状態。場所。
 15 小説・劇・事件などの中心人物。
 17 自分の考えたとおそうとする気力。意地。
 19 意味・価値のないさま。
 21 他人の悲しみや苦しみを“わがこと”のように親身になって感じ、いたわること。
 22 砂をいさい穴から少しずつ落とす。その量で時を知るしかけの時計。
 24 普通とちがいに事態に驚くこと。
 25 楽天主義の人。
 27 松と竹と梅。
 28 夢を見ているような心持ち。
 29 庭。特に手をかけて造った庭。

タテ

- 01 投票用紙に投票者の氏名を記入した投票。
 02 夜、野外で陣營を設けた宿ること。
 03 みずからを誇る気持ち。プライド。
 04 地球は他の惑星と同じように太陽の公転するという学説。
 05 自分のからごと。そのもの自身。
 08 非常にわずかな間。瞬間。
 10 人生観・世界観において理想を重んじる
 ↳ 現実主義
 11 人間の声による音楽。うた。
 13 はっきりと心に決めること。
 14 はてにある地域。特に南極・北極
 16 公衆がいつでも使えるように設けられた屋
 18 気圧をはかる器械。
 19 思いやりのないこと。感情がないこと
 20 白い砂浜に青い松がはえている海岸
 21 いろいろに住んでいながら、それぞれ別のこ
 22 いること。また同じ仕事をしていたが、目的が
 23 こと。
 23 遊ぶ楽しむ場所。
 26 一つの家に生活する家族の集まり。また
 夫婦・親子などと構成される。

(付録2)

次の英文は英国18世紀の著名な文人 **Samuel Johnson** (1709—1784) の筆になるものである。Samuel Johnson の文体については英文学者齋藤勇に次のような解説がある。

彼の文体は“Johnsonese”という言葉さえあるほど特色のあるもので、我が国の漢文体の如く、Latin derivatives を夥しく用いて重厚の感を添え、対句、照応等の修辞法に富む。

(「英文学史」)

ここで「我が国の漢文体の如く」と評されるこのような英文をその雰囲気損なわずに日本語に移し変えるには漢字熟語の知識を用いるのが有効であろう。以上のことを念頭において次の英文を日本語に移し変えてみよう。(ラテン語に由来する単語には下線を施した)

[問題]

Pope was from his birth of a constitution tender and delicate; but is said to have shewn remarkable gentleness and sweetness of disposition. The weakness of his body continued through his life, but the mildness of his mind perhaps ended with his childhood. His voice, when he was young, was so pleasing that he was called in fondness the little Nightingale.

Being not sent early to school, he was taught to read by an aunt; and when he was seven or eight years old, became a lover of books; a species of penmanship in which he retained great excellence through his whole life, though his ordinary hand was not elegant.

(From 'Pope' in 'Lives of the English Poets')

(注 01) 1992年5月30日 学校法人宮崎学園発行

(注 02) 原文は次のような英文である。

Course Description: in this course students study Kanji as a useful unit in the Japanese writing system. Students acquire basic abilities to express themselves efficiently and precisely in writing through learning Kanji. They also learn its importance in the Japanese language from different perspectives. As Kanji is an ideograph, students enrich their word stock through learning Kanji and Kanji idioms. A rich vocabulary enhances their expressive powers. The Level 2 Kanji Proficiency Test is the present goal of the class. The class activities include puzzles like Kanji crossword. (From the college bulletin, 1999)

(注 03) 「平成11年度第1回受験要項」によれば志願者数は

平成7年度592、512人、平成8年度854、607人、平成9年度
1、056、710人、平成10年度1、177、498人である。

(注 04) Davis, Scott (1998 - Anthropology), B.A. (Interdisciplinary Studies) Ohio State University; M.A. (Regional Studies: East Asia), Harvard University; Ph.D. (Anthropology), Harvard University. Research interests include East Asian culture, philosophy, religion, and antiquities. (宮崎国際大学のホームページから)

(注 05) <四字熟語の表>

愛別離苦 暗中摸索 青息吐息 一期一会 一言居士 一汁一菜 一罰百戒 一騎当千 以心伝心
 意気阻喪 意気衝天 意馬心猿 意到筆隨 隱忍自重 異口同音 雲散霧消 有為転変 荣枯盛衰
 会者定離 円転滑脱 温故知新 温厚篤実 感概無量 伏刀乱麻 夏炉冬扇 汗牛充棟 俛背奪胎
 勧善懲惡 我田引水 佳人薄命 權謀術數 鯨飲馬食 鶏口牛後 堅忍不拔 輕拳妄動 刻苦勉勵
 綱紀肅正 巧運拙速 兵越同舟 五里霧中 光彩陸離 孤軍奮闘 古今無双 厚顔無恥 孤城落日
 誇大妄想 高論卓説 疾風迅雷 質実剛健 初志貫徹 熟慮断行 人跡未踏 深謀遠慮 小心翼翼
 自網自縛 順風滿帆 縱橫無忌 秋雷烈日 針小棒大 首尾一貫 神出鬼没 信賞必罰 齡生夢死
 寸善尺隴 青天白日 前人未到 前代未聞 清廉潔白 先憂後樂 生殺与奪 千載一遇 是非曲直
 晴耕雨読 勢力伯仲 前途洋々 率先垂範 泰然自若 暖衣飽食 大欲非道 多岐亡羊 胆大心小
 大言壯語 單刀直入 朝令暮改 朝三暮四 沈思熟考 転迷開悟 天涯孤獨 天衣無縫 低頭傾首
 当意即妙 東奔西走 道聽塗説 同床異夢 同工異曲 内憂外患 南船北馬 内疎外親 日進月歩
 馬耳東風 白砂青松 万縁一紅 百家争鳴 美辞麗句 比翼連理 付和雷同 粉骨碎身 不即不離
 不偏不党 不盲实行 普遍妥当 富貴利達 奮勵努力 弊衣破帽 片言隻語 傍若無人 墨守成規
 漫言放語 明哲保身 面目強如 面従腹背 名実一体 明鏡止水 夜郎自大 優柔不断 用意周到
 容姿端麗 竜頭蛇尾 古色蒼然 才氣煥発 四面楚歌 切磋琢磨 粒粒辛苦 隨機应变 理路整然
 論旨明快 老成門熟 和洋折衷 疑心暗鬼 輕佻浮薄

(注 06) 1997年11月 財団法人日本漢字能力検定協会発行